

# 巻頭言

比較日本学教育研究センター長  
古瀬 奈津子

2013年度本センターでは、第15回国際日本学シンポジウムと第8回国際日本学コンソーシアムを開催いたしました。第14回国際日本学シンポジウムは、本学のフランス文学の先生を担当者として、「フランスへの憧れ—生活・芸術・思想の日仏比較—」の統一テーマの下、開催されました。

1日目のセッション1では「生活文化」について、衣食住や大衆娯楽などの生活文化におけるフランスの影響を考えました。フランス料理について多くの著書を書かれている作家の宇田川悟氏をお招きして講演していただいたほか、宣教師や中原淳一、クリスチャン・ディオール、「ベルサイユのばら」を上演している宝塚歌劇にいたるまで、興味深い研究発表が行われました。

2日目のセッション2では「芸術・思想」について、20世紀を中心としたフランスの芸術や思想の日本における受容が検討されました。著名な比較文学者である芳賀徹先生による特別講演、詩人野村喜和夫氏の現代詩の朗読を含んだ講演、アンサンブル室町の動画上演や、加藤周一やフランスにおける生存主義者と宮本常一の比較など、芸術表現から現代思想まで、フランス文化受容の諸相について研究発表と討論が繰り広げられました。

このように、このシンポジウムは、フランス文学研究者がフランス文化そのものについてではなく、フランスの日本への影響を考えるというもので、日本においてなぜフランス文学・文化を専攻する必要があるのかということに問うことにもなったと思われます。

一方、第8回国際日本学コンソーシアムは、2008年度に続いて「食・もてなし・家族」を統一テーマに、日本思想・文化を中心とした日本文化部会Ⅰ、日本史を中心とした日本文化部会Ⅱ、日本文学部会、日本語学・日本語教育学部会、全体会が行われました。昨年度は海外からの参加者がやや少なかったのですが、今年度は日本学術振興会学術研究動向調査等研究費を使用して、例年より多く海外から参加していただくことができました。

また、今年度も副専攻「日本文化論」を実施しました。英語による茶の湯についての講義や音楽文化に関する学際的な講義など、通常は開講することのできない授業を学内教育GPの支援により開くことができました。

本センターは、今年度も特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムをはじめとした様々な支援により活動することができました。厚く御礼申し上げます。

以上のように、今年度も無事に諸行事を行うことができたことを喜ぶとともに、センターの経済的基盤の安定を図ること、そして国際日本学の新たな可能性を開くことを目指していきたいと考えております。みなさまにはこれからもご支援いただきますようお願い申し上げます。

2014年3月